

令和4年度第3回岡山市総合教育会議

日時：令和5年2月7日（火）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時30分 開会

○司会 定刻となりましたので、ただいまから令和4年度第3回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 よろしいですね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 お願いします。

○司会 では、傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしく願いいたします。

○市長 はい。それでは、次第に沿って議事を進めます。

本日は、教育大綱が目指す子どもの育成に向けて、5つの力を測る4つの指標の状況と、前回の総合教育会議で議論のありましたコミュニケーションを基盤とした読解力の育成に関して報告していただき、それらを踏まえて今後の課題や取組の方向性などについて議論していただきたいと思います。

前回に引き続き、岡山市中学校長会の長瀬会長、また小学校長会の高山会長にもご出席をいただいております。お二人からも学校現場における取組、ご提案などをいただければと思います。

まず、資料について教育長から説明をお願いいたします。

○教育長 はい。失礼します。10分程度お時間をいただきまして、今日資料は4つありますので、この内容について説明をさせていただきます。

まず、今回のテーマを「岡山市教育大綱が目指す子どもの育成に向けて」にいただきまして、ありがとうございます。

第2回総合教育会議では、基礎としての2つの目標に対する分析から、今後取り組むこととしてコミュニケーションを基盤とした読解力の育成を提案し、協議をいただきました。その中で、まずはコミュニケーションを基盤とした読解力を分かりやすく伝えること、指標と取組の具体を明確にすることが必要と考えました。また、5つの力を育む4つの指標の全ての状況も今回分かりました。そこで、本日おいでの長瀬校長、高山校長をはじめ、校長会や事務局内で協議を重ね、熟考した結果、私が令和5年から令和7年度の3年間で重点的に取り組もうと考えることをお手元の資料を使ってお伝えしたいと思います。

まず、資料1をご覧ください。

これは第1期大綱から第2期大綱へのつながりと、見えてきた課題から令和5年から令和7年度に何に集中的に取り組むかの全体像を表したものです。

資料2をご覧ください。

ここには5つの力、「活用力」、「表現力」、「向上心」、「社会性」、「人権尊重の精神」を測る4つの指標の達成状況を表したものです。

特にグラフ④、「人が困っているときに進んで助ける」と回答した児童生徒の割合は、小学校では年々減少、中学校で本年度大きく減少し、他者を大切にする意識が低いことが分かりました。

これを、資料1に戻っていただきまして、中段右側の見えてきた課題に前回報告した課題と併せて記載しております。情報活用力が十分でない、記述式問題に弱い、考えを発信する力が弱い、今回の調査で分かったことですが、他者を大切にする意識が低いことです。

また、そこにコロナ禍という表記がありますが、議論を進める中で気づいたのですが、3年間続くコロナ禍によって、子どもたちがマスクを着用し、表情が見えにくい状況で過ごしてきたこと、対話が減少していること、どうしても自分事になりにくい、学習や生活の満足度に我々の想像以上に大きな影響があるのではないかと考えております。これまで我々が大切にしてきた互いの感性や考え方に触れ、刺激し合うことの重要性と、今だからこそ、これを強固にしていく必要性を改めて感じたところです。

そこで、令和5年から令和7年度は学びの土台を強固に育む集中期として、以前テーマとしていた言葉がなかなか定義が難しく、校長先生も教員に伝えやすい、そしてみんなが言葉で分かるような「やる気につながる好奇心」という言葉をテーマとし、この醸成に取

り組んでいくこととしました。これは根本的に前回のものと変えるものではなく、みんなに分かりやすい言葉に代えたということでご理解いただければと思います。先ほど申しました、子どもが他者に気持ちを向けることや自分事として考えること、身の回りのことに意識を向けることが重要であるということは変わりません。

ここで「やる気につながる好奇心」に込める私の思いでございますが、子どもは本来、人との関わりや様々な活動の中で面白がったり、なぜかなと知りたい気持ちでわくわくしたりするように好奇心に満ちていると思います。大きくなるにつれ、そこが表しにくくなったり、大人が受け止められなくなったりしていることもあるように思います。そこで、好奇心という物事を探究しようとする根本となる知りたい気持ちに、我々の意識をフォーカスしていきたいと考えたのです。このことについては、小学校低学年、小学校高学年、中学生、発達段階によってアプローチは違うものであろうと思います。そして、新教育センターのコンセプトにも幼児教育、幼児期からの連続性もございます。そういったあたりをこのテーマでみんなで考えることができたらいいと考えています。

資料3をご覧ください。

この「やる気につながる好奇心」と大綱の5つの力、4つの指標との関係性を図示しております。

学校ではもう既に取り組んでおりますが、5つの力、4つの指標の実現に向けて着実に進めているところです。子どもが本来もっている興味や関心を刺激し、高めることが、さらにこの5つの力を伸ばす原動力ということが分かるようにしています。

資料4をご覧ください。

この資料は、これから進めていく「やる気につながる好奇心」を強固に育むために、教育委員会と学校が具体的に何をするか、その取組状況をどう評価していくかを表したものです。

学校では他者と話し合う活動を充実させ、振り返りを徹底することで、子どもたちの意欲の高まりを実感できるようにしていきます。そのために教育委員会は授業改善や振り返りのイメージが共有できる授業モデルのリーフレットを作成し、学校の取組を積極的に支援します。また、好奇心は家庭や地域で育むことも大きな意味があることから、好奇心につながる取組を支援する事業を充実させていきたいと思っています。そのために本日は事務局の課長が総出でこの会に参加しております。本日の議論を踏まえて、さらにどのようなことを充実していくのか。まずは学校教育での授業改善を来年度進めてまいります。

将来的に学校教育でなく社会教育でも何ができるのか議論したいと思っています。

そして、これら教育委員会と学校の取組状況を測るものとして指標の例としておりますが、2つの視点を設けて振り返りをしている学校を令和7年度までに100%にすることとしております。ここに記載している現状値は急遽、校長会にアンケートしたのですが、2つの視点を設けていないアンケートです。振り返りをしたか、しないかという現状値としては、85.5%が今の実績値であります。ただ、我々が目標としているのは、この指標の視点を2つ設けた振り返りですので、少しハードルが上がると考えております。

そして、振り返りについては今まであまり定義をしておりませんでした。頑張ったことや身に付いたこと、解決に向かった自己の向上や、人の考えや様々な情報など、解決に役立ったことなど、多岐にわたると思います。まずは、市教委としては2つの視点をもって重点的に見ていこうとするものであります。

そして、もう一つの指標は、年々下がってきております「学校の授業は分かりやすく楽しい」と回答した子どもの割合を増加させることとしております。

最後に、今後は3月、4月の校長会で私の思いを説明するとともに、先ほど申した我々の取組を保護者や地域にも様々な媒体を使って発信していきたいと考えております。そして、教育委員会として決めた取組については、教育の単年度ごとの計画に位置付け、外部委員の評価や全児童生徒、保護者、教職員を対象とした調査結果などを見ながら教育委員会のPDCAサイクルを回し、3年間責任をもって進行管理していきたいと考えております。

説明は以上でございます。ご協議よろしくお願いたします。

○市長 ありがとうございます。

この資料を作るに当たっては、校長会とも議論しているというように聞いております。こういう教育長の説明に至った経緯、校長会として何を議論したのか、各学校がどういう議論をしているのか、そのあたりも含めて教えていただければと思います。

まずは、長瀬会長からお願いできますか。

○長瀬中学校長会長 失礼いたします。学びの土台ということについては、いろんな疑義があつて、土台そのものについては今後検討の余地があるかなとは思っています。ただ、載っていましたように、コミュニケーションを基盤としたというのは十分理解できるんですが、読解力というのはあまりに幅広ですので、これをどう解釈するかによって随分と評価の指標も変わってくるだろうということは出まして、もう少し分かりやすい言葉にする

か表現そのものを変えていく必要があるのではないかという議論が出ています。

その中で、これは私個人の意見かもしれませんが、5つの力を一気にぐっと高めていくようなエンジンとして、この「やる気につながる好奇心」というものがあるのかなと感じています。一つ一つの力を高めていくというのは、それぞれの学校で今やっていると思うんですけど、5つを有機的に結び付けて全部の力をぐっと上げていくという意味であるとすれば、学びの土台というのも理解できるのかなというのが1点です。

それから2点目、これは私が少し気になっていたのですが、活用力とか表現力とか向上心もよりよいものにしていこうとする力と捉えると力としても読めますし、社会性というのも人間関係力という言葉に置き換えれば力として読めるんですが、どう見ても人権尊重の精神というのは人間の根底にあるものなので、この5つをどう整理していくのかというのが今までずっと引っかかってきていました。その中で今回好奇心という言葉が出てきて、割とすんと落ちた部分があって、つまり人権尊重って何だというと、人が好きとか人のことを知りたいとか、ある意味そういう好奇心につながる部分もあるのかなと。

当然その好奇心というのもバラエティーに富みますが、特に人権尊重の精神というところをエンジンとして高めていくという意味において、人に興味をもつ、まさにコロナ時代ではもう自分事、自分だけよければいいみたいなところの中で、他人に興味をもって他者とつながることが自分を高めていくことにつながるんだと考えるものだとすれば、それももっと関わりたい、もっと知りたいというところにつながっていくので、好奇心という言葉は割とフィットしているかなと。人権尊重の精神の部分で特にフィットした言葉というのは感じていますので、この5つの力ないしは資質を一気にまとめて高めていく力として、今後3年間でこの「やる気につながる好奇心」というのをテーマとして重点的にもっていくのは妥当な考え方と今のところは校長会としても考えているところです。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

では、高山さん、お願いいたします。

○高山小学校長会長 失礼します。小学校長会のほうは、昨年度この第2期教育大綱ができたときに、校長会の中でしっかりと我々校長が理解をしておかないと現場に下ろすことができないということで、それを教育企画総務課のほうから実際にいただいたりして、校長会の研修会の場で、まずこの教育大綱について我々自身がしっかり理解すると。そうしないと下ろしていったときに、全くいい取組になりませんよね。それで、それを後で実

際に評価できるんだらうかということがありますので、これができたときに当然我々も意見を研修会等で述べさせていただいているんですが、具体的な、まず今回の5つの力とか、このあたりが実際にどういうものを狙っているのかと。

また、その評価指標についても十分理解できてない部分もあったので、校長会の中は6つの委員会があるんですが、その中の一つの委員会でしっかりとお聞きして、昨年度理解をしていって、我々の学校教育の基本計画とリンクをさせてやっていかないと。要するに、教育委員会はこんなことを考えておると、一方で学校はこうだといって全く離れていたのでは、これは成果にも何もならないということで、まずはそれに取り組みました。

それでまた、今回、教育長が「コミュニケーションを基盤とした読解力」ということで、わざわざ校長会の研修会に来て、その思いとか理念を語っていただいたので、それに対して校長会で、例えば読解力に対してどういう取組ができているとか、これを岡山の子どもたちに対してどういう取組ができているとか、それから授業の終わりに、振り返りというのを言語活動でやっていくわけですが、実際に今どういうものに取り組んでいるのかということ、各校長が学校の中でヒアリングをして、実際にまとめたものを出していただきました。また、こういうことができそうだということも出していただきました。

それで、結構60ページぐらいにわたる量が出てきたんですけど、それをしっかり読ませていただくと、まだ捉え方がかなり様々で、このままでいくと難しいかなということで、そこについては教育委員会とも話をさせていただいて、今回の「やる気につながる好奇心」という方向で、土台をより強固にということやっていくということで、少し整理をしていただいたと。

それで、資料の3のほうに少し整理をして書いていただいたので、こういったイメージなのかなということが分かってきました。それをより強固にしていくことで、上の5つの力を育んでいくための原動力になっていくということで、前回の教育長のお話の後、我々の校長会で吸い上げた意見を基に、またそれを教育委員会で見ていただいて、現場の実態をしっかり捉えてくださってやってくださったのかなということで、非常に下ろしていきやすくなったと捉えております。

○市長 ありがとうございます。

それでは、各委員にと思いますが、その前に、資料2の②は全国平均の数字が点線で挙がっているけど、①、③、④というのは全国平均が挙がっていないのは、資料がないんですか。資料は、相対的な数字がないと、なかなか評価しづらいような気がするんですけど。目

標値だけあるじゃないですか。

どうぞ、植山さん。

○事務局 企画調整担当課長でございます。

③の協力しようとする児童生徒の割合でございますが、これについては令和3年から全国の中には「協力して取り組むことが楽しいと感じる」ということでございますが、この後、持っている資料をすぐ調べましてお伝えをさせていただきます。③、④については、岡山市の中でどういう状況かを見ていく指標にしたために全国との比較を入れてはおりませんが、調べまして、すぐお答えをさせていただこうと思います。

○市長 確かに経年的に見て落ちているというのは何が原因なんだろうというのは、その比較は必要だと思うんですが、やはり全国の子どもたちとの比較がどうなっているかというのがあって、初めて我々の立ち位置みたいなのが分かるところもあるので、できればお願いをしたいと思います。

それでは、小学校、中学校の校長会の話も伺いましたけれども、今回の教育長の説明また資料に対してご意見などあればお願いしたいと思います。誰からでも結構ですが。では、石井さんお願いいたします。

○石井教育委員 失礼します。ご説明ありがとうございました。

まず、コロナの時代を経て、改めてこの教育大綱をそれを受けて、それに合ったものにしていくということと、その内容について前回の会議で受けたことを、校長会の中でもかなりお話いただきながら、本当にきちっと実施ができるものにしていくということを考えていただいていることに非常にうれしく思いました。

その中で、この「やる気につながる好奇心」というのは、私は事業を経営しているんですけども、事業を運営していく中でもいろんな施策をやっていくんですが、それを社員の皆さんがやる気になるかどうかというのが土台にあって、それがどうやったらやる気になるのかということに非常に苦心してしまっていて、そのこととも一致して、この土台にこれがあるんだということは非常に腹落ちするものがあります。

それで、会社の中でいろいろやっていくんですけども、その中でこうやったら好奇心につながるのか、こうやったらやる気につながるというのもあるんですけど、こうするとやる気を落としてしまうとか、こうすると好奇心を失ってしまうという、そういうことをやらないということも非常に大事だと考えてしまっていて、例えば「挑戦しろよ」と言っておきながら失敗したら怒ってしまうとか、あるいはいろんな提案をしてくるんですけども、

提案する人に仕事を押しつけてしまうとか、例えば会社の中でいうと、そういうことがあって、こうするとやる気がなくなるとか好奇心がなくなるといふ研究も大学とか、いろんなところでされていると思いますので、この資料4の中で教育委員会はと書かれているところの中で、つながる取組以外に「こうすると失敗するよ」といふようなものも入れていただけたらいいんじゃないかなと感じています。

それからもう一点は、この資料4の「学校は」の視点の中で、「友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを」と書いてあるんですけども、今の資料2で④で人を大切にできるとか人が困っているときに進んで助けられるといふところの数値が落ちていることを考えて、もし加えられるのであれば、「自分の考えも深めれるし、他の人に貢献できる。他の人の考えを深めたり」といふところも入れられないのかなといふ素朴な疑問をもちました。

それから、「学校は」の視点の2つ目のもっと知りたいといふところに書いてあるんですけども、知りたい以外にも、例えば分かりたいとか理解したいとか、そういう知りたいだけだと知識的な感覚といふのが私にはありますので、算数的といふか、それ以外の表現の方法といふのも知りたい以外にあるかもしれないと感じています。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

片山さんに行く前に、今の石井さんの「まずは、失敗事例を書くべきじゃないか。」といふご意見に対して、教育長なのか、校長会なのか、教育委員会のメンバーでもいいんですけど、どなたかコメントがありましたらお願いいたします。

○教育長 今回、議論の中で今言われた内容があったんですけど、例えば家庭、学校もあるかもしれませんが、家庭の中で本当に子どもが「どうして、どうして、どうして」といふのがあって、大人が忙しくて、どこかで「もう、うるさい」と切ってしまう場面は、どこのご家庭でもあるんじゃないかなと。学校でも授業を進める上である程度やりたいことがあって、つぶやきをどんどん出す子どもは当然いますよね。そのつぶやきを上手に活用する先生もいれば、「静かにしましょう」で止めてしまう場合もあるんで、確かにそうだなといふのが感想です。

○市長 両校長会の方、何かありますか。

○高山小学校長会長 小学校なので、日頃授業の中で、特に低学年だと、当然学習そのものが分かったりできたり、昨日までできなかったことができるようになったりします。そ



れ自体が確かに喜びということもあるんですけど、好奇心、子どもって何でも触って見たかったり、やってみたかったりします。知的なものではなくて、活動そのものをしたいというか、活動欲求とか、小さい学年で僕も一緒に生活科でやってみたいとか、体育でもやってみたいとか、そういった活動欲求もあります。

それから、例えば疑問や「あれっ、何でなんだろう」というのを醸成していくということとは特に低い学年について大切にしています。どの教科でも、「今日はこの勉強をするんだよ」という形で出すのではないように意識しています。一方、高学年になってくると、それがどちらかという知的な好奇心とか、そういったものになっていくという気がしています。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

教育委員会のほう、資料があるんですか。

○事務局 あります。

○市長 今の岡山市の子どもたちが①から④に関して、②は大体全国平均並みの感じになっているという感じは数字で大体イメージがつかめるんだけど、それ以外はどんな感じになっているんですか。

○事務局 指導課長です。

③番の協力しようとする児童生徒の割合ですが、小学校、岡山市が93.3に対して全国は94.0です。また、中学校が岡山市が94.2に対して全国は94.7と若干低いという数字が出ております。

④番の「人が困っているときに進んで助ける」と回答した児童・生徒の割合ですが、小学校、岡山市が84.6に対して全国は88.9、中学校、81.7に対して全国が88.4という数字になっております。

以上です。

○市長 どうしてこんなに差があるんですか。

○事務局 ④番の「人が困っているときに進んで助ける」の調査ですが、今回資料に挙げさせていただいているのが、「岡山市教育に関する総合調査」というもので秋に調査している数値です。それに対して②、③は4月に調査している全国学力・学習状況調査の数値ですので、学校がスタートしたての頃に調査したものとある程度の年度の途中で学級が落ち着いた状態で測ったもので、幾らか差が出てきているという感じはしております。

○市長 それは何となく分かるような気がしますよね。それなら今後の話として、調査の時期を合わせることはできるんですか。

指導課長がおっしゃっているのは理屈が通っているような気がするんですけど、比較していくとすれば同じような時期に同じ調査をやる必要があるような気がするんですが、何かの事情でできないというんだったらやむを得ないかもしれませんけど、何かありますか。

○事務局 全国学力・学習状況調査の質問の中身ですが、毎年、質問項目が少しずつ変わってきている傾向がありますので、それを防ぐ意味でも秋の総合調査に同じ文言を入れているということで、今回、最新の情報を入れました。同じ時期の数値のほうが比較はしやすいと感じておりますので、またここは調整をさせていただきたいなど。

○市長 そうですね。目標値というのは一体何なのかよく分からないですからね。全国平均というのを頭に置きながら、子どもたちの立ち位置を理解して指導していくということが重要ではないかとは思いますが、またここで最終結論を出す必要はありませんけれども、よろしくご検討のほど、お願いいたします。

片山さん、どうぞ、申し訳ありませんでした。

○片山教育委員 失礼いたします。本当に言葉としても分かりやすいし、保護者の方が聞かれてもイメージが湧きやすい。「やる気、ああ、付けたいな」とか、「好奇心、ああ、もってくれたらいいな」とか、すごくイメージしやすいと思います。

本当に雑感なんですけれども、好奇心をもって、それから振り返りでみんなで自分の考えを深めたり広げたりすることができたり、さらにもっと知りたいと思う気持ちはもちろんなんですけれども、できればそこから自分で探究するというか、好奇心をもつだけじゃなくて、それを解決しようとする原動力としての実際の行動というんでしょうか、そういったところをもっと身に付いていくということも含めて、何か好奇心、やる気というところを育んでもらえたらいいなと思います。

そんな中で、ICTの活用というのを今後そこにどのようにリンクしていくかということがすごく重要かと思えます。個別最適な学習という意味で、みんなで深めて広がった考えを、もっと今度はその時間が終わった後で個別に深めていくとか広げていくとか、新たに湧いた疑問を時間内には収められなかったけど、自分で追究してみようとか、そういった自己探究型というか、そういったところにつなげていくと、今岡山の子どもの家庭での自分で考えた学習時間が短いというところにも、自己学習力につながっていったらいいな

らありがたいなと思います。

それからもう一点、先日見せていただいた行政視察ということで連れて行っていただいた廿日市市の小学校では、自由進路学習ということで学校の中でも自分の興味関心に合わせて追究できて、同じような興味関心をもっている子どもたちが随時集えるような、そういう学習のシステムというか、仕掛けというか、すごく自由度高くもたれていて、好奇心とかやる気を大事にするためには、あまり枠組みをつけ過ぎるとなかなか自分の興味関心というのがもちにくくなっていくのかな。そのあたりの自由度というのをどんなふうに考えたらいいのかなということを思いました。

最後にもう一点は、子どもたちがやる気をもって好奇心を追究していくためには、大人がやる気をもつとか好奇心のある環境とか、そういう人的環境となり得るとするのはすごく大事で、私ももうしょっちゅう、子どもの話を「ああ、もう今忙しくて聞けない」とか、そういう状況もあるし、大人が与えられた課題をするのが一生懸命で、何とかこなす課題というのに取り組んでいると、なかなか子どものモデルとして何か自分が大人自身が好奇心をもったり、大人自身がやってみたいと思うことを仕事においても私生活においても実現するゆとりとか、そういったものも重要ななと思うと、先生方がそういう子どもを育てていただく上で、まさに子どもにとっての人的、重要な環境としてモデルとしていただくには、それこそ今進めてくださって来年度の予算にもたくさん上がっていた先生方の働き方改革につながるような何かそういったことも、子どもが目指したい大人とか子どもが目指したい学習スタイルだったり姿というものを何か一緒につくっていけるとうか、何かそんなこともあったらいいなと思いました。

以上です。

○市長 最後の大人というのは教員のことですか。

○片山教育委員 いえ、教員に限らず、社会の人、親ももちろんですし、それから今職場体験とか、いろいろ地域にも関わっていただくような場もいろいろあるので、いろんな大人が周りで生き生きしていることというのは、子どもにとって、自分もそうなりたいという思いとか、そこから好奇心、どうやったら、ああなれるんだろうとか、そんなふうになるかなというふうに思いました。

以上です。

○市長 おっしゃるとおりだと思いますが、世の中全体を我々を変えていくというのは、なかなか難しい面もあるので、逆に言うと、教員との関係、保護者はもちろん、我々とし

て、こうあってほしいということで誘導していくというのはあると思いますけど、直接的には教員に何を求めていくのかという議論が相当パーセンテージを占めるということで、ここの議論というのはやったほうがいいのかなと。

今日たまたまですけど、学校給食費を先生が集めるのではなくて、教育委員会のほうで集めるという件について発表しました。これは、1つには先生方の負担を減らして、先生方が子どもと話ができる、向き合える時間を増やしていこうと。今、片山さんがおっしゃった点の一助とならないかということではやってると思うんですけども、何か意見がありましたら。

○片山教育委員 おっしゃるとおり、あまり広げ過ぎてもいけないので、学校教育の環境と家庭はそこには入っていくといいなと、保護者の教育力とか養育力の向上という意味であつたらいいなと思います。

以上です。

○市長 どうすればいいでしょうね。そこはたぶん、寺子屋時代から永遠の悩みではあるんでしょうけど。

では、河内さん、お願いできますか。

○河内教育委員 失礼します。先ほどから教育長のご説明を伺ったり、それから皆様のご意見を伺ったりして、やる気とか好奇心というのが学びの土台だなということは改めて実感しております。この好奇心というのは幼児期の子どもにとっても大変大切な育ちの要素であって、幼児期から高校生まで一貫して育ていきたい大切なものだと思います。熱中して、わくわくして、子どもたちみんなの心がつながり合う、そういう楽しい授業といいますか、そういう学びであってほしいと思いますので、そういう教育長の思いが込められたワードとして分かりやすいのかなというような気がします。

ただ、少し心配なこともあります。先ほど市長がおっしゃった、先生方にどれだけ伝わるかということと関連があるんですけども、もともとこの「やる気につながる好奇心」とか、こういう重点的なものが出てきたのは、これまで活用力というものが十分ではないと、そういうところがスタートであつたと思うんですね。この活用力ということと、この「やる気につながる好奇心」ということが、どれだけ学校の先生方にダイレクトにつながるかというところで少し懸念があります。

というのも、学校ではよく使われているのが、授業の最初、学習の始まりのところで興味や関心をもたせて子どもたちに学習に入らせるということを大切にしている。そこ

でよく好奇心という言葉を使っているわけです。だけど、教育長が思っているのは、そこにとどまらずに、もっと知りたいとか解明したいという、知識や情報に基づいた知的好奇心とか探究心とか、そういうものだと思うんですね。なかなか学校の先生方にそこがダイレクトに伝わらないんじゃないかなということ、教育委員会のほうからも併せてリーフレットを示されるというふうなことが書かれてありましたけれども、やはり仕掛けが必要なのかなと思います。

例えば、前回、長瀬校長がおっしゃった、めあてというのが単に提示するめあてでなくて、子どもたちが自分はこのことを解明したいとか、あるいはこういうふうな方法で自分は、よし、挑戦してみるぞとか、そういうめあてを一人一人が自分の言葉で具体的にしようという取組をされているということをおっしゃられたと思うんですけども、あるいはもっと知りたい、もっと分かりたい、解決したい、そういうふうな思いが実現できるような活動を工夫するなど、ヒントになるようなことを一緒に併せて示すことで、この好奇心ということ先生方がしっかりと理解といいますか、「大事だな」ということをしっかりともっていただけるような資料を用意して説明していくことが必要ではないかなと感じました。

○市長 河内さんのご意見に対して何かありますか。

では、上西さん、お願いいたします。

○上西教育委員 「やる気につながる好奇心」ということで、非常に分かりやすく私は大賛成です。好奇心があるから意欲が湧き、意欲があるから学ぶ力となって成果も出ると。その成果が出ることによって次への疑問等が浮かんで、また次の好奇心が湧くという形で、うまく好循環していけるということが非常に望ましいと思っていて、そうなれば自然と子どもたちの力が伸びていくと捉えられると思いますので、このような表現というのは非常にすばらしいと思っています。

具体的にどうしていくのかなというところが確かに今、河内さんが言われたように難しいと思うんですが、ちょうど私も子どものノートとかを見ていて、まさに、めあてとまとめというものを必ず書くような授業になっているようで、私はその辺をうまく使えるのではないかと。今、河内さんが言われたとおり、めあての書かせ方とか、あとまとめの仕方も何が分かったとかではなくて、誰のこういう意見がよかったとか、あと成果がこの次、ここにつながるみたいなことを少し書き方を工夫したり、学校の先生が少し例を示してあげたりとか、そういうことによって、まずつかみのところで何でこういうことを勉強する

か。一通り学んで、ここで学んだ成果がどういうところに、日頃の生活も含めて、次への課題も含めて、つなげていけたら、うまく回っていくのではないかと思いますので、その工夫を先生方にしっかり研究していただいて、また教育委員会のほうでもそういう資料を出していければ、いい方向につながるのではないかと思います。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

上西さんのご意見に対して何かありますか。

では、私からの疑問点を幾つかよろしいでしょうか。

まず、今のめあてではないんですけども、我々も目標をもってこういう定量評価、資料2にあるようなことをやってきてるんですけども、例えば②にしる④にしる中学生でぐんと落ちているんだけど、何で落ちているんですか。

○事務局 指導課長です。

先ほど数値のほうを申しましたが、岡山市の数値も4月の段階での数値が出ていますので、お伝えさせてもらってよろしいですか。

④番の「人が困っているときに進んで助ける」の回答ですが、小学校は4月の段階では86.7。それに対して全国が88.9という数字です。それから、中学校のほうは4月の段階で岡山市が87.1。それに対して全国が88.4という数字になっております。

○市長 となると、経年的に見ると、それは落ちてないということですね。

○事務局 そうです。ただ、このグラフ自体が秋の調査なので。

○市長 このグラフは令和4年だけが10月じゃなくて、令和3年より前も全部10月。となると、やっぱり落ちていますね。

○教育長 落ちてるんです。

○事務局 そうです。4月の令和3年の数値と比較しても1ポイント程度落ちてはいます。

○市長 4月も全国よりも下であり、かつ経年的に見たときも、この10月から5ポイント下がっている。この理由は何ですか。

○事務局 推測でしかないんですけど、このコロナ禍でマスクをしていて表情が見えない、手助けをしても相手が喜んでいるのかどうかも分からないという中で、なかなか人と接するのも難しい。ソーシャルディスタンスを取りなさいと言っている中で、あえて積極的にやるのが難しいのかなと、そう感じている子が若干増えているのかなという気はしております。

ます。

○市長 となると、やっぱり全国平均と比較してみないと駄目だということですよ。ここでの資料はいいと思うんですけど、逆に言うと、我々はこの社会性、人権尊重の精神を高めるために議論をしている中で、先生たちも動いていただいている。その実証値というのは一体何なのか。我々は定量的に出していこうとしているわけじゃないですか。今おっしゃるように、コロナの問題というのは、これは子どもたちに大きな影響を与えているだろうということは確かだと思うんですが、となったときに岡山の人間と他の全国の平均が一体どうなってるのか。それが別に先生たちが悪いと言っているわけではないんだけど、それを改善するためには何をしなければならないのかという議論をきちっとやらないと駄目な気がするんですよ。

これに対して何かあればお願いします。

○奥橋教育次長 教育次長です。

今、市長がおっしゃられますように、全国との比較というのは確かに必要なと思います。特に④の人を大切にできるというふうな意味でも、この数値が全国的にどうなのかとか今回のコロナ禍ということがどのように影響しているのか。恐らく人と接する機会が減っている、一緒に活動する機会が減っているのも、こういう体験をした子が減ってきているのは事実だと思いますので、それは全国も減っているのかどうかというのは、全国の数値を見てみようと思います。

ただ、岡山市で今つくっていただいた大綱で見る4つの指標というのは、先ほど指導課長が言いましたけれども、学級というものができた、集団ができていった、この時期に調べる必要もあると思いますので、そこら辺は並行して、岡山市の課題もつかみながら、全国の傾向をつかみながら、こういう形で示していきたいと思っています。

○市長 奥橋さんのおっしゃるとおりだと思います。我々として、いろいろと動いていった、その結果というのは非常に重要で、ただ、その経年的な評価と、あとは全国との評価、縦横の話をきちっと整理した上で、これがうまくいっていないときは何がうまくいっていないのかという分析をしないと、単に目標値だけつけて、そうなればいいねみたいな話というのは、よくないというように思います。

それから、例えば②のところでも小学生は令和3年から令和4年にかけて伸びていると。大綱をつくっていく過程の中でのこういう数字を取ったのは事実なんですけど、校長会等々でも十分こういう②でいきましょうという話をしながらも、中学生は若干数字が落ち

ている。これがネグリジブルなものなのかどうかというのはあると思いますが、こういったところもきちっと評価していただいたらと思うんですけども。

○奥橋教育次長 教育次長です。

本当にここの比較というのは難しいんですが、中学校は特に協働学習というのを中心的に、要は机を並べて意見を言い合うという活動を実施していたところ、このコロナ禍でその活動が減ったということで、子ども同士の関わりの中で探究していくという部分を少し感じ取れなかったかなと物足りなく感じている子どもも増えたのかなとは思いますが。

○市長 やったほうがいいですね。そういう面では全国の中学生は上がっていますから。それに対して、こうなっているのは、何が原因なのか。やはり原因を整理した上で対策を講じていくことが重要なのではないかと思います。

それから、もう一つだけお伺いしたいと思うんですけど、第2期の大綱というのは、これだけ校長会とも議論し、委員の先生方とも話をして、こういう形で整理させてもらった、それはそのとおりだと思うんですが、第1期の大綱の考え方は継続してるはずだよね。その学力であるとかいじめであるとか不登校であるとか、そういったものの推移というのは、これはこの前、全国学力・学習状況調査のところで整理して出しているということでもいいわけかな。どうでしょうか。それで、そこは順調に1期の議論はこなしているという理解をしてよろしいでしょうか。

○奥橋教育次長 はい。1期の大綱で目指していたことにつきましては、学力については偏差値のあたり、そこは維持できていると考えています。ただ、新規不登校ということだと、若干まだ課題を残しつつあるので、ここについては新たな策が必要かなと思っております。

○市長 という話を、繰り返し繰り返し不登校とかいじめの問題等々、我々は常に忘れずに、こういったところに記述をして先生方の議論等々を受けながら前に進んでいかなければならないと思いますので、考慮をいただければと思います。

以上、私の質問であったんですが、この4枚の話は全体として教育長と校長会で議論して、ある面の本質を突いてるのではないかという意見だったと思いますが、この4枚の話でも結構ですし、そのほか今の時事問題、ほか何でも結構でございますので、ご意見があればお願いしたいと思います。

今度は、上西さんからお願いいたします。

○上西教育委員 時事問題といったらコロナが、まだ国全体での方針がはっきりしてない



んですが、先ほど議論の中でコロナの影響というのは相当子どもにはあったのではないかと。これからデータで出てくるんだと思いますが、推測できると思っています。となると、令和5年以降コロナとの関わりをどのように岡山市としても考えていくかというのは非常に興味があって、私も小学生の子どもがいますが、お姉ちゃんはよかったなど、いろんな活動ができてと、私はどこも行けなかった、山の学校がどうだったとか、いろいろ言うんです。そういうところがあるので、そこらあたりの議論はもうたちまち令和5年はすぐ来るとしますので、なるべく子どもたちへの影響が少ない方法というのを考えていただいたらいいなと思っています。

○市長 これは、まずは教育長ですね。

○教育長 国で議論があり、卒業式もマスクをどうするかというのは今後通達が出ると思うんですが、多分あれだけ出るということは外す方向だと思うんですけど、大規模校と小規模校の差が岡山市は大きいんです。ソーシャルディスタンスを取りなさいと言われてたら大規模校は何もできません。逆に小規模校は本当に子どもが少ないので、もう距離を取りやすいんで、何か言えば、ほとんどのことはできるんじゃないかなというような気はします。もっと深刻なのは、マスクを取りなさいじゃなくて、マスクを取るという方針が出たときに外せない子が確実に出ると思います。外せない子は私の楽観的な考えでは夏暑くなれば取るかなという、もう連休明けから暑くなれば普通なら取れるんかなと思うんですが、ただそのこととて、デリケートな子もいるので、そのあたりを先生方がどう配慮するかというのはあると思います。

この間、県と市の教育委員の懇談会があって、協議会のときに教育委員に議論いただくテーマがあればいいなというところで、僕もそここのところをもし時間があればアフターコロナで教育委員さんがどんなことを考えているかというのを議論できたら面白いなと思ってたんですけど、そこはどんなですかね。学校現場も多分これから県や国からガイドライン、市からガイドラインが出て、実際大規模校、小規模校で運用が変わるのではないかなと思うんですが、そのあたりは逆に聞いてみたい気がします。

○高山小学校長会長 失礼します。これはマスクだけにかかわらず、行事、先ほどのように活動、学習形態そのものも制限されますよね。1クラスに40人ぎっしりいる学校と、私も小さい学校に勤めたことありますが、もう10人ぐらいしか子どもがいない学校、そもそもソーシャルディスタンスは全然問題ないですから、もう例年どおりの、例えば行事ができるかなということだったと思うんですけど、もううちも1,300人を超えますので、体育

館で音楽会をするときに、これって実際やっていいもんか、いけないものかというようなこともすごくあったのですが、ただコロナも3年目を迎えてきて、最初はもう何も分からない状態ですよ。要するに何も検証されてない。何が正しいか全くそれは分からないんですけど、ある程度こういうことをすれば感染は起こらないというか、起こりにくいなどというのが見えてきまして、実際のところソーシャルディスタンスも、うちなんか2メートル取って、例えば机並べるなんてことはできないです。現実的に無理です。そうなると、学校を休みにするしかないですから。

ところが、現実的にできるだけですから、1メートルでもいいんだということでやっているんですけど、その中でずっと学校の中で通常マスクをして、給食のときは同じ向きをということをやっている中で、ほぼ感染が全く起きないわけじゃなかったんですけど、どちらかというと家庭から持ち込むパターンが多かったように思うんです。だから、その中で工夫をして行事は本年度についてはかなり進めてきていると思います。工夫の中で全部が全部とは言えないかもしれませんが、大体のことは進めてきているのではないかと考えています。

ただ、マスクについては、これは実は体育の時間なんかで原則外はマスクを取ります。ところが、私もびっくりしたことがあるんですけど、運動会でリレーで当然マスクはもうすごく体力を使いますから、瞬発力ですから、マスクを外しましょうと言うんですけど、現実的には高学年の子は外さずに走るんです。大丈夫かなと。

○市長 どうして外さないんですか。

○高山小学校長会長 いや、かなり指導もして、実際のところは心臓にもかなり負担が来ますから。

○市長 心臓に負担がかかるし、吐いた息がそのまま入ってくるから、かえってマイナスのところはあるんですよ。

○高山小学校長会長 こうなってくると本当に教師自身がマスクを取ることをしないとなかなか難しいと。

○市長 マスクが定着し過ぎてるわけですね。

○高山小学校長会長 本当にそうですね。

○教育長 顔を見られたくないとか。

○市長 顔を見られたくない。

○教育長 はい。

○高山小学校長会長 それもあるかもしれませんね。

○教育長 ある。何か女子生徒はあるといってね。

○上西教育委員 今の運動会の話はまさにそうで、ダンスとかを学年でやっているときも多分1割も取ってないんじゃないかなという感じで、学校の先生か何か司会席のほうからマイクでマスク取ってくださいって3遍ぐらい言われたんだけど、取らないですね。だから、よほどもう定着しているという印象です。

○市長 小学校3年生って、小学校に入ってからずっとつけてるということなんですね。

河内さん、あれば結構ですが。

○河内教育委員 コロナつながりで、本当に子どもたちも何か3年間いろんな経験が希薄で、そのまま大きくなっているというところが非常に気になる場所なんですけど、先生方も今は若い先生が非常に多いんですけど、学校行事を自粛したりすることがたくさんあって、経験しないまま数年がたってしまう。あるいは、もっと前からいえば、教育実習ですとか、そういうのも密に行えないまま現場に出ないといけない。それから、年配の先生も3年間やってなくて久しぶりに行事をすると、もう忘れてしまっているようなこともあったりして、本当に学校の先生はご苦労されているんだろうなということを痛感しています。

○市長 全ての行事、同じところがありますけど、それをこれから習熟していただくしかないような気はしますけども。

片山さん、ありますか。

○片山教育委員 失礼します。コロナつながりで、先ほどのマスクを取りたくないという件なんですけれども、思春期の子どもたちは本当に表情を隠せることによって、ある意味、自分を隠せる部分もあるかと思います。だから、マスクによって守られてる自分というのもあったと思うし、私の実習に行く学生とか、それから新任で保育の現場に出た学生、卒業生なんかも、保護者の方と出会って、いろいろ自分が窮地に立たされたときに焦っている自分も見られなくて済むという、マスクに守られたではないですけども、そんなエピソードを聞くこともありました。

それから逆に、今度は不登校問題でいくと、今体調不良というのは大学もそうなんですけど、ちょっと風邪様症状があると積極的にお休みしてくださいというのがあります。なので、実質心の面に行きたくないところがあっても、多少身体症状を理由にするとお休みが正当化されるんですよね、だから、そういう意味で、もしかしたらこれから出てくるこ

とが当たり前、対面が当たり前になったときに出てこれない人がいると、事実上、増えていく。何かそういうこともあるかな。

○市長 それはまずいですね。

○片山教育委員 いや、そういう懸念があります。

あと、同じようにいじめもそうなんですけど、結構子どもたちの中で容貌とか、そういったところでのいじめというのが多少なり、あつてはいけないのですが、そういうところも何か思春期の子どもたちと話をしていると、いや、何か私はあまり笑顔を見せたくないとか。何かそんな隠せているのが当たり前みたいところが、これから暴露されていくところで、そういったところを徐々に段階的にというか、子どもたちのそれこそさっき1年生入って3年生まで、おっしゃっていたようにお互いの顔を知らないままに来ているので、何か初めまして、こんにちはではないけど、何かそういう段階的な緩やかなマスクを外すタイミングを計るとするか、あまりそれを大々的にするのも何なんだけど、そういった配慮もあってもいいのかなということと、もう一点、このコロナ禍によって、さっきいろんな規模縮小でやってきたことがあって、意外に規模縮小でも大丈夫というようなこともあったかと思います。そういう意味で、働き方改革と絡めて、必要のないものとか、今まで慣習的にやってきた行事とか業務とか、そういったことを今回うまくスクラップできたものは、もう戻さなくてもいいのではないかということも個人的に思います。

以上です。

○市長 ちなみに、今日は火曜日ですが、今週で日、月、火というと、岡山市の感染者は100台から200台なんですけど、これは、10月の数字にまで落ちてるんですよ。なぜ落ちたかというのを東京の専門家会合の分析を見ますと、自然免疫、日本全体でかかった人間が今3,000万を超えてますよね。そうすると1億2,000万のうちの4分の1、25%、これが表に表れている陽性患者、これ、プラスアルファが相当数あるだろうと言われてますよね。それから、あとはワクチン接種の関係。1月の頭、最もひどいときは2,300人、岡山市だけであつたんですね。それが今の状態になっているというのは、よっぽどの変異株がない限り、ある程度、安定していくのではないかと考えております。

たまたまですが、3人の委員の方からこういうマスクの問題、これが単に大人であればマスクの着用をどうするかというだけで済むのが、子どもたちの心理に大きな影響を与えるのではないかということだろうと思うので、教育委員会もよく分析をしていただいて、もちろん文科省の方針もあるでしょうが、我々独自で何ができるのか、何をしなければな

らないのかをよく考えていただければと思います。

お待たせいたしました。

○石井教育委員 コロナのことでいえば、違いをどこで感じたかという、今、日本の国の中での違いというよりかは、日本とそれ以外の国での対応、対策の違いだとか、あるいはそれぞれの人がどういう行動を取っているかという違いを強く感じました。それで見ると、例えば学力についても岡山市民として岡山が全国の中でいい状況でありたいとかあってほしいという願いも当然あるんですけども、社会で生活する中で世界に対して日本が何か遅れているのではないかと世界と違う方向で頑張り過ぎてるのではないかとという疑問も常に大きくなってきてまして、そういう意味で小・中学校で学んでいくことについて全国の中でもいい状況にあったらいいんですけど、世界を意識したところというのは文科省が考えてやっているんだと思うんですけども、そこは常に意識しとかなないと何か心配だなと個人的には思っています。

以上です。

○市長 世界を意識するとは、どういう意味ですか。

○石井教育委員 例えば、自己肯定感とか夢とかをもっている子どもの比率で見たら日本は圧倒的に少ないとか、そういうところも違いますし、例えば今回のコロナの中で何か学校のICTの取組が圧倒的に遅いと。圧倒的かどうか分からないですけど、遅いと言われてみたりとか、何か世界との違いの中で結構違いがあるところはたくさんあって、本当に日本の子どもが強化すべきところは、世界で最終的には、世界で個人が全部戦っていくわけではないと思うんですけども、日本、国全体で戦っていかなければいけない中で、世界基準の身に付けておかなければいけないものが、本当に身に付いているのかという視点のことです。

○市長 なかなか言うは易し行うは難しのところがあって、ロシアのウクライナ侵攻が行われていることは事実ですけど、それを踏まえて一体何をどう教えていくのかって、そう簡単な話ではないような気はいたしますが、教育委員会ないしは教育長の見解があれば。

○教育長 今、数字がないですが、世界と比べるのは実は数字があると思うんですけど、割とよかったような記憶があります。取りあえずは岡山市でここへ掲げているもので、学校現場でできることというところで地に足をつけて頑張れたらなと思っています。

それから、マスクのことが話題になりましたけど、給食のときは外してます。だから、給食のときに外せるのであれば逆に取れるかなという気持ちも今あるんですが、ここは議

論をしておいたほうが良いような気がしますので、またお願いしたいと思います。

以上です。

○市長 これから近々の問題であることは間違いないですからね。

○教育長 そうですね。

○市長 よろしいでしょうか。教育委員会の事務局、あと総務局、何かありましたら。

よろしいですか。

では、まだ若干時間はありますが、本日のご意見を整理させていただき、また皆様方にもお示しさせていただきたいと思います。

今回の総合教育会議は来年度になりますが、今後もこの会議を教育長また教育委員の皆さんと情報を共有し、活発な議論を通じて十分に意思疎通を図っていく場にしたいと考えております。この会議によって本当に子どもたちが少しでもいい成長が望めるように考えていきたいと思っておりますので、我々からも資料提供はさせていただきますが、委員の皆さん、また校長会の方も従来の意見にこだわらずにどんどん意見を言っていただければというように思います。

それでは、今後ともよろしく願いいたします。事務局に進行を返します。

○司会 ありがとうございます。

今回の会議は改めて通知させていただきたいと思います。

以上で令和4年度第3回総合教育会議を閉会いたします。本日はどうもお疲れさまでございました。

午後4時43分 閉会